

日本農村生活研究会東北支部第1回研究会報告

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
巻/号	35
掲載ページ	p. 45-49
発行年月	1974年7月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



とについて、御意見をいただきたい。

安間（静岡県農業技術課）・これまでの論議で、消費者としてとらえることの重要性は理解できた。農家は、生産者でありかつ消費者でもあるという両面をもっており、ある場合は生産者的な立場で行動し、他方では消費者として住民運動などを通じて地域問題の解決に立ち向うことも必要とされる。そこで、課題の解決に当って、両面使い分けてゆくというような取組みが、私共にも必要だろうと思う。

このこととは別に、生産組織の論議のなかで私が疑問に思ったことは、都市近郊で、農家が僅かに点在するだけといったところでの生産組織問題を、どのように考えたらよいかという点である。私共の場合、現実の問題としては、これが一番ウエイトが高い。

長谷川（司会）・本日の論議は、いわば農業集落というか、農家がまだ多く残っているところを前提に進められたので、安間氏が指摘された都市近郊について

はふれられていない。しかし、現実にはそうした地域がふえてきているので、これは別に課題をたてて、次の機会の論議としたい。

長島（司会）・このシンポジウムを通じて、「むら」とその再編の問題をめぐる生産、生活両サイドからの問題提起と論議があった。特に「むら」内部に有しているポテンシャルが論議の中心におかれたが、外部のポテンシャルについても、さらにふれたいところであった。すなわち例えば中山氏の報告でふれられたアグリシステム開発構想などのように、「むら」をとり巻く大きな環境の変化、さらには観光農業の導入などの最近の動きのなかで、「むら」のイメージも大きく変わりつつある。そうした「むら」内外のポテンシャル相互の関連のうちに、「むら」の変化をとらえることが、今後追求さるべき共通課題として明示されたところで、本日のシンポジウムを終りたい。

日本農村生活研究会東北支部第1回研究会報告

「近年、農家の生活水準の向上はまことに著しいものがあります。このことは、農家自身のたゆまぬ努力のたまものであることは云うまでもありませんが、普及事業をはじめ、各種農業団体の適切な指導援助に負うところもきわめて大きいと云わねばなりません。またこの間に日本農村生活研究会も関係する各分野の専門家、研究者を結集して知見の交流、問題の検討に努めてきました。

しかしながら、農業、農村、農家をとりまく事態はますます厳しくなっておりますし、農村生活の諸問題はきわめて複雑、難解の度をましてきております。そのような現実に対処して、今後一層の改善を求めてゆくためには、これまで以上に関係者が一体となって問題に取り組む必要があります。とりわけ普及指導に当る方々と、研究に携る方々、さらには農業を自ら営みながら農村生活を指導しておられる方々とが、緊密に知見の交流を行ない、理論と実践を統合してゆく「場」

をつくり出すことの重要性が痛感されます。

日本農村生活研究会は全国的組織として、20余年にわたってその役割を果してきましたが、今日、東北の農村生活を直視するとき、行政、普及、研究のより密接な、地域の問題により密着した、連携、協力が望まれます。幸い、東北各県において、ようやく組織的に農村生活に関する研究が進められるようになっております。われわれはこの気運の盛りりを基盤として、東北関係の会員が中心となり、ここに一つの支部を結成して、関係各県のご支援を得て、東北農村生活の直面する問題を集中して検討・研究することのできる「場」をつくりたいと思います。

以上は日本農村生活研究会東北支部結成の趣旨である。地域に根ざした研究会を望む声が東北でつよくなり、全国に先がけて、青森県の後援の下に、昨年9月18、19日の2日間にわたり、十和田湖畔の字樽部で支部を結成し、研究会を開催した。出席者はほぼ

100名に達し、東北各県の大学、試験場、専門技術員のほか、多数の生活普及員が参加した。なお農研生活科や中国農試などからも特別参加をいただいた。

第1日は記念講演とシンポジウムをおこない、支部設立総会のあと、夜はなごやかな懇親会がもたれた。第2日は、集落再編成を実施し、高冷地野菜団地としても注目されている青森県南津軽郡平賀町善光寺平を視察し、また青森県立リンゴ試験場の見学もおこなった。

記念講演は、東北農試木下経営部長が「東北農業の現状と将来」、農業技術研究所南生活科長が「生活問題・生活改善・生活研究」と題して話された。木下部長は、戦後、幾度か農業の曲り角が論じられてきたが、今や環境保全や、福祉など外部経済を包括した経営・生活の接触領域が重要な研究分野になりつつある点を指摘するとともに、東北農業の方向について言及された。また南科長は、くらしの問題をとりあげるとき、われわれはあまりにも「農家」という通念にとらわれすぎているのではないかと、もっと自由な立場で、主体的な取り組みが望まれることを強調、それぞれに深い感銘を与えた。

シンポジウムは、共通課題「農村生活の現状と再編の方向」のもとに、次の4つの報告を柱にしてすすめられた。

①農村における生活環境整備（東北農試、橋本恵次）

②集落再編後の農家生活の対応（青森県弘前地区普及所、西塚りつ）

③機械化の進展と婦人労働（秋田県農試、柴田昭治郎）

④農家生活の現状と方向（岩手県宮農指導課、武田智恵子）

橋本氏は、農村の生活環境整備の現状と問題のなかで、農業の生産基盤と生活基盤を一体的に整備することの必要性を強調した。物的な側面に偏した集落整備だけでなく、人間関係に配慮した部落再編をも包括する村落整備が必要であると、またこのような事業をすすめるに際しては、最終的な受益者としての住民が自主的に自らの生活環境の維持向上の必要性に目ざめることが必要であると述べた。

西塚氏は、交通の便が悪く、あらゆる面で住民生活に支障をきたしていた集落の、集団移転事例について

報告を行った。移転の結果生活は便利になったが、経費は増加してきている。今後は高冷地野菜栽培による収益の増強と、野菜、山菜などの共同加工および、販売などを通じ経営の安定をはかり、出稼ぎのない部落づくりを推進する方策について、体験にもとづく発表をおこなった。

柴田氏は、田植、収穫作業の機械化に伴う、共同田植を中心とした生産組織の再編について報告した。兼業の浸透は大規模層にも波及し、農業自立のための経営は一層の拡大を必要とするなど、農村の生産、生活に新たな展開が必要となってきた。健康と豊かさの調和のためには、まず、機械化による稲作の省力化と集団化による費用軽減が基本であり、これを前提にして複合化、規模拡大が進められるべきであるが、このような所得追求が、家族の健康な生活をおかすようなことがあってはならないと、生産と生活のあるべき方向を示唆した。

武田氏は、岩手県下の農家調査にもとづいて、現状の問題点を整理した。生活の方向では、「生きがいある生活」は、生涯をとおして職業意識の高揚をはかり、自らの生活の支えとなる経済的基盤を確立し、精神面を豊かにして創造性をのばすような趣味の充実をはかることであるとし、高令者の役割にも言及して、農家生活と農村社会の方向づけをおこなった。

これらの報告を素材として、秋田県立農業短大山崎正、宮城県農政部大原一郎、山形県農試中山誠一郎の3氏が座長となって討議がおこなわれた。討論は以下のように、主に山村問題にしばられたかたちになった。

山崎（司会）・主として橋本氏の報告から論点を示せば、次の2点である。一つは環境整備というとき、物的な側面からのアプローチを通じて整理されたものが多いが、生活には、人間関係の面も含まれており、この両側面の関連をどう理解すべきかという問題である。もう一つは、農村には農家も非農家もあり、それぞれ所得をあげる場面は違うが、生活の場は共通である。住民が地域住民として生活していく時、農家と非農家、専業と兼業がどうかかわっていくか、またそれをどう考えて行ったらよいか、ということがある。それぞれに難かしく、かつ重要であると思うので、十分討議していただきたい。

橋本：豪雪地帯で集落再編を行った山形県小国町の

例について紹介する。新集落は町はずれに200戸ほど収容出来る団地がつくられ、農家も非農家も入る。ここに幸和会館という中央センターがあり、老人と子供の集まる広場になっている。これは無人センターではなく、辺地集落から移転した60才のおじさんが団地200戸の人達に雇われて、簡易郵便物の事務取扱をしながら会館を管理している。会館は、使う人達が知恵を出し合って作り上げたもので、非常に使い易くなっている。すなわち組織が主体となってフィジカルな面とメタフィジカルな面とを統一して作り上げたということで、珍しい成功事例であると思う。2つ目の問題はむづかしいが、沢内村の移転農家は村内の紡績工場、製靴工場などに雇用され、農業は通作の形をとっている。専業農家、兼業農家は所得を得る場面で分化してきており、その調和をどうするかは今後の問題である。

神保(山形県試)・生活から見れば移転した方がよい。しかし経営発展を考えると、通作ではうまくいかない場合が多い。

土屋(会津短大)・生活と生活を支える経済とが必ずしも一致しなくてもよいと思う。大都市のサラリーマンが、都心に住んで幸せでないからベッドタウンというのがある。農村でも生活の基盤は公害のない、設備の整った環境のいい所におき、通勤農業、通勤兼業があってもいいと思う。

神保：山村の場合、農家が移転すると山は無人化し、集落の機能が失われてしまうし、通作の場合には、道路の維持などにこれまで以上に経済負担が大きくなる。こうした状態のなかで、最低の集落戸数規模は何戸位必要と考えるか。

保田(中国農試)・生産と生活の問題には矛盾がある。中国地域では通勤兼業が主体であるが、それでも小集落では冬場に不幸があった場合に葬式さえむずかしくなっている。結局、社会的な居住面の機能が保障されるか否かという問題になる。その場合は隣接集落との社会的な規模も関連してくる。そこで生活圏をどのように作っていくかという事が重要な問題となる。

工藤(中国農試)・西目屋村と沢内村、小国町の3つ目の例をきいたが、いくつかの違いがあると思う。西目屋村では経営主が出稼ぎで留守をし、子供は冬は合宿所に入り、それに母親がついて行き、あとに残され

た年寄が、わしらを殺すのかという事である。この年寄達の発想であるが、そこには「家」というものがある。これに支えられた集落移転ではないかと思う。神社、お墓の移転もそうである。これに対し小国町で幸和会館が新しい拠りどころとなっているとしたら、人々を結びつけているシンボルみたいなものは、施設から出てきていると理解していいかどうか。沢内村もこれらとは違っている。そこで、集落移転に関して農民の価値意識がちがいが、それぞれに対応した集落移転のあり方が成り立っていると考えられる。

長谷川(農研)・集落移転ということが何に対してどういう意味をもつかということが知りたいが……。

君塚(東北農試)・私は、それぞれの部落には顔があると思う。部落には歴史的経過があるし、生産基盤人間関係も違う。そのようななかで、それぞれの「むら」の生き方をしっかり見究めることが大切であり、そうでないと画一的になってしまう。

村人達の考え方をどうつかむかという、むしろわれわれの側のつかまえ方をもっとシビアに考えねばならない。今の経済中心の時代のなかでは、移転したら撤退の方向になり、都会に向いてしまう。より賃金の高い方に行くのは自然の流れであろう。そこでわれわれの「場」がある。経営の問題でも、生活の問題でもしようがないということでは今までの主体性のない研究者、普及員ということになる。今転換しなくてはならないのは先程の南氏の御指摘のとおりである。そのところの議論が必要である。

山村の崩壊している現実をどう理解し、どう歯止めをかけ、村の人々がほんとうに求めている生き方に対して、われわれがどうお手伝いできるかということである。私はコミュニティと村の関係、家と家庭の問題を議論していただけたらと思う。それは質的に違ったものと理解するが、村の人達は民主的につきあっているし、昔の家父長的な関係はほとんどくずれてきている。それが日本の今の段階でのコミュニティだと考えている。もう少し具体的にいうと、現場の普及員さんの現実の問題をききたかったことと、コミュニティというヨーロッパ的な村になってしまうという錯覚をおこすが、「むら」はどのような「むら」になっていくかという視点で見つめていく必要がある。

この間岩手県の婦人グループの文集を読んで、これ

がコミュニティだと思った。それは生活改善グループ活動が土台になっている。個別の改善運動が一通りおわると自己展開する。48年度朝日賞を授賞した岩手県軽米町車門の例でいえば、すばらしいリーダーもいるが、酪農家とタバコ農家がお互いに厩肥、労働力、土地などを出し合いグループ同志で協定して経営を行なっている。一方集会所が欲しいということから、嫁さん達が演芸会を開いて資金を集め、立派な集会所を建てる。そこでまた託児所を開くという形でお互いに知恵を出しあって部落づくりをしていく。これこそ立派なコミュニティだと思う。

今の農村は非農家も入ってきて部落の中で分化がはげしい。しかし生活環境を整えて行くという共通の関心からいえば生産面よりも生活面の方がより結合しやすいのではないかと思う。今はつながりをもっていくことが一番大切な時期ではないか。人間関係づくりからやっていくことだ。岩手の農家で専業の立派な母さんに会ったが、裁縫、編物などで兼業の母さん達を引きこんでいる。そんな所に糸口を見つけていければと思っている。

石川(岩手県農家)・私達の場合も生活環境をどうするかで話し合っているが、大切なのは受益者である住民の主体性が一番基本になると、百姓をしていてそう思っている。したがって実施したことが今成功しなくても、それで考える農民が1人でも多く出れば長い目でみて前進ではないかと思っている。大事なのは村の人間関係をより高めながら、物的合理性をどう追求していくかということであって、それが農村問題解決の課題であると思う。

山崎：柴田氏の報告で最初に健康と豊かさの調和ということの提起があったが、経営研究の中から生活のあり方について問題提起はないか。

柴田：稲作では技術体系が出来上ったので当然それと複合部門を加えた方向になるだろうが、その中からまた新しい問題が出てくると思う。比較的大型の稲作+野菜農家で、経営改善意欲の旺盛な経営ばかりを見たが、所得は300~500万円のクラスである。結局経済的には満足しているが、このような忙がしい生活を一生続けるかと思うと、どうも釈然としない面が残るといふ。そのことの問題として後継者は経営に批判的である。農業経営発展の中には、きびしい労働条件を要

求するジレンマみたいなものがある。南科長、橋本氏が経済合理性の追求だけではないかというが、その場合現実の農業をどう画いているか、それを具体的に、手がかりになるような追求のしかたで示していただきたい。

山崎：現実の農家には、農業経営と生活の両者をどう調和させながらともども発展させていくかという非常にむずかしい問題がある。これに対しては、専門化の間で具体的な問題点を出し合って解決策の検討を進める必要あろう。その場合、農業の面でも生活の面でも、個別に解決される問題と地域的に集団で近隣社会の中で解決する問題があることを考えないといけない。農家と非農家、専業と兼業が住民という共通の立場で居住する地域をどう発展させて行けばよいか考えてゆく。また集団移転なども考えねばならない事態になっているが、生活面でのロス、農業面でのロスが現在の農家の経済力からいくとかなりある。これらについても、お互いに考えて行かねばならないことである。

以上がシンポジウムにおける論議の概要であり、このあと支部の設立総会にうつり、さきの結成趣意書にそって支部が正式に発足し、今後、日本農村生活研究会の規約に準じて運営されることが申合わされた。なお初代支部長には山崎正氏をおし、各県数名の運営委員の選出がきまった。夜の懇親会では各地の民謡などが多数披露され、参会者一同の親睦が一段と深められた。

第2日も快晴に恵まれ、平賀町の善光寺平開拓地の見学が行われた。大根の収穫、加工の様子をみたあと、新集落の建設状況を視察した。

後日参加者から研究会の感想がよせられたが、シンポジウムのもち方について普及員の声をもっと反映できるような研究会が望まれており、次年度は更に充実した会にしたいものと念願している。

なお第2回東北支部会は目下準備中で以下のように予定されている。

場所：岩手県国立岩手青年の家(岩手県岩手郡滝沢村)

期日：昭和49年8月7日(水)・8日(木)の2日間

統一課題および話題提供者については岩手県農試、

岩手県営農指導課，事務局東北農試農家生活研究室で目下検討中であるが，多数の参加を期待したい。

(東北農試，佐藤ちせ)

事務局だより

1 新会長が就任されました

4年間にわたってお世話になった沢村前会長がこのたび退任され，49年度から，竜野得三氏（農電研理事）が就任されました。

2 第17回日本農村研究会総会が開かれました

48年11月1日，農技研講堂で開催され，議題として提案された，47年度決算報告，48年度予算ならびに中間収支報告，同会計監査報告について，承認されました。

なお，49年度予算案は，計数的な見通しのついた時点で事務局が原案を作成し，はがきによって会員の承認を得ることになりました。

3 第1回常任委員会が開かれました

5月16日に農技研において開催され，つぎの議題が承認され，促進することになりました。

①会計年度の変更について

大会開催期が秋季に定例化したので，これに会計年度を合わせるために，これまでの4月から翌年3月までを，10月から翌年9月までに変更したい。

②6カ月予算の編成について

会計年度の変更に伴う処置として，49年度予算期を4月から9月までの6カ月とする。

③会費値上げについて

最近の印刷費値上げのため，正会員会費年1,000円を，50年度から1,500円に値上げしたい。なお，この件および会計年度の変更には，会則の変更を必要とするので，会員の承認を受けるための手続きをとること。

④本年度会誌刊行について

35号は約2カ月程度刊行が遅れたが，36号は大会時配布を目標として準備をすすめる。

⑤第22回大会準備について

開催日を10月31日・11月1日の2日間とする。

発表者の依頼，発表要旨の印刷，シンポジウム課題と話題提供者の決定を，担当係で促進する。

⑥会員名簿作成について

49年度印刷の予定であったが，予算の関係から50年度に延期したい。

4 新事務局の役割分担

事務局長 君塚塚 正義（農技研）

庶務・会計 久保良雄（同）

編集 長谷川 宏二（同）

同 高橋 淳（生活改善課）

同 長島 守正（日本大学）

大会 安田 壮平（農技研）

同 小泉 浩郎（同）

同 石川 寛子（目白女子短大）

編集後記

今回は事務局の体制の整うのが遅れ，それに伴って，会誌の発行も大幅に遅延せざるを得なかったことを，まずお詫びしたい。その上，編集期間も著しく圧縮され，会員の皆様から広く寄稿をいただくことが不可能となり，掲載論文数も内容の構成も不十分なままに終わってしまった。

新しく編集を担当することになって，このスタートの遅れは大きいハンデになったが，次号からは，名誉挽回を期すべく企画をねっているところであり，会員の皆さんの御賢察を願うこと切である。

(長谷川記)